台大日本語文研究第 31 期
2016 年 6 月，頁 129-153
2016-03-23 收稿，2016-05-16 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2016.31.129

關於明治 30-40 年代武士道論之一考察
—以其傳統思想省思為中心—

簡曉花*

摘要

維新後，一舉西化，歷經甲午、日俄戰勝，至明治 30-40 年代，國家主義逐漸高漲，傳統色彩濃厚之「修養書」風潮盛行，同時眾多之武士道論亦陸續問世，換言之，武士道論於西化、國家主義、傳統回歸等諸多浪潮中登場，其思想營為亦呈現多元。歷來之明治期武士道論研究大多傾向於自西化、國家主義等背景課題進行研究，本研究則針對武士道論自身對傳統思想內省之課題進行探討，乃以山岡鐵舟、新渡戶稻造、井上哲次郎之武士道論為對象，分析歸納三者各自所呈現之傳統省思，以廓清明治武士道論樣貌之一隅。其結果獲知，鐵舟的武士道論乃是明示武士道之要素為神儒佛，並主張以此遏止西化及科學至上之歪風，傳統思想成了對抗西化及科學之武器；新渡戶則清楚具體的定義了神儒佛三者之作用，並主張要以基督教來維持存續武士道，傳統思想成了調和基督教之材料；而井上則是自武士道擷取並否定了其佛教要素，且肯定強調儒教之道德主義，他主張要以武士道之實踐精神來實踐儒教以及觀念論之道德主義，傳統思想之局部成了融合德國觀念論之零件。此三者之武士道論可謂為一種以儒教為最大共通點之傳統思想再現。

關鍵詞：武士道、山岡鐵舟、新渡戶稻造、井上哲次郎、儒教

* 中華大學應用日語學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

A Study on the Bushido Treatises in Meiji 30 to40 : Focus on Introspection of Traditional Thought

CHIEN Shiaw-hua *

Abstract

After Meiji Restoration, westernization took Japan by storm. Until the period of Meiji 30 to 40 , nationalism gradually emerged along with the boom of the traditional writings of self-cultivation. Numerous Bushido treatises also came to the fore. Over the years, Bushido treatises research during Meiji has been more oriented towards the research topic about westernization and nationalism, and studies on the introspection of traditional thinking are relatively rare. In light of this, focusing on Bushido treatises by Tesshu, Nitobe and Inoue , and their traditional thinking are analyzed and generalized to compose the following facts. Tesshu explicitly disclosed that the essence of Bushido is composed of Shinto, Confucianism, and Buddhism, turning traditional thinking into a countermeasure against westernization and science; Nitobe clearly defines the correlations between Shinto, Confucianism, and Buddhism, turning traditional thinking into a medium with which Christianity can blend; Inoue negates Buddhism but affirms Confucianism, turning parts of traditional thinking into modules which can be put together with German Idealism. Thus, we can say that the three revitalized traditional thinking with Confucianism as their commonality.

Keywords：Bushido,Yamaoka Tesshu,Nitobe Inazo,Inoue Tetsujiro
Confucianism

* Professor, Department of Applied Japanese, Chung Hua University

明治 30-40 年代における武士道論に関する一考察
－伝統思想への反省を中心に－

簡暁花*

要旨

維新後、一挙に西洋化し、日清・日露の戦勝を経て、明治 30-40 年代頃、国家主義が次第に高まり、伝統文化色濃い「修養書」ブームが流行し、数多くの武士道論も続々と世に問われた。武士道論は西洋化や国家主義、伝統への回帰などの思潮に登場し、思想的には多元的となっている。従来の研究は、西洋化、国家主義等の課題によるものがほとんどである。それに対して、本研究は武士道論における伝統思想への反省という課題から考察し、山岡鉄舟、新渡戸稲造、井上哲次郎の武士道論を対象に、それらの伝統思想への反省を分析してまとめることによって、明治における武士道論の様相の一部を浮き彫りにした。その結果、以下のことがわかるようになった。まず、鉄舟の論では、武士道の要素は神儒仏であるとし、伝統思想が西洋化や科学と対抗するための武器だとしている。新渡戸の場合、具体的に神儒仏三者の働きを定義し、キリスト教によって武士道を存続させるべきだとし、伝統思想がキリスト教と調和するための材料だとしている。井上は、武士道から仏教という要素を摘出して否定し、儒教の道徳主義を肯定している。また武士道の実行精神によって儒教や観念論の道徳主義を実践すべきだとし、伝統思想の一部がドイツ観念論と融和するための部品だとしている。この三者は儒教を最大の共通点とした伝統思想の再現だと言えるであろう。

キーワード：武士道、山岡鉄舟、新渡戸稲造、井上哲次郎、儒教

* 中華大学応用日本語学科教授

臺灣大學學術期刊資料庫

明治 30-40 年代における武士道論に関する一考察
ー伝統思想への反省を中心にー

簡暁花

一、はじめに

維新後、西洋化の波が一挙に襲来し、日清・日露の戦勝を経て、明治 30-40 年代(1897-1912)頃、国家主義が次第に高まり、伝統文化色濃い「修養書」ブームが流行し、同時に数多い武士道論も続々と世に問われた[1]。言い換えれば、武士道論が西洋化や国家主義、伝統への回帰などの思潮に登場し、思想は多元的である。こうした武士道論を如何に把握すればいいかが本研究の問題となっている。

それに関して、従来では、明治における武士道論に関する研究は数多いとは言えない[2]。その中で、菅野氏の研究では、国民道徳精神

臺灣人學學術期刊資料庫

[1] 従来では、明治の武士道論について論及したとき、多くの研究が B. H. Chamberlain,「*The Invention of a New Religion*」(LONDON: WATTS &CO.,1912)、「武士道―新宗教の発明―」、バジル・ホール・チェンバレン著・高梨健吉訳、『日本事物誌 1』(東京：平凡社、1969) pp. 86-102 といった著作の観点を使って、明治の武士道は伝統の発明または創造であるとしている。しかし、実際、武士道という語彙は、明治になってからはじめて発明された造語ではない。それは遅くとも江戸に入ってからの文献にはすでに登場しており、やがて明治に大流行した。以上のことは、すでにさまざまな研究で指摘されている。たとえば、橋本実、『日本武士道史研究』(東京：雄山閣、1934)、佐藤堅司、「「武士道」といふ語の起原と發達-「武士道思想の發達」を傍系として」、『駒澤地歴學會誌』2 (東京：駒澤大学、1939) pp. 7-27 、笠谷和比古、「武士道概念の史的展開」、『日本研究』35 (京都：国際日本文化研究センター、2007) pp. 231-274 等が武士道という語彙や概念を紹介しているので、ここでその内容を重複する必要はない。そこで、本研究では、誤解や曖昧さを避けるため、敢えて武士道の創造また発明という言葉使いはしない。またどうしても必要な場合、武士道の再現という言葉を使うことにする。ちなみに、最新の研究として、笠谷和比古、『武士道ー侍社会の文化と倫理』(東京：エヌティティ出版、2014) pp. 3-94 の第一章「武士道という語の登場」では、17-19 世紀における武士道の用例が詳細に考証されているので、大いに参考になる。

[2] たとえば、船津明生、「明治期の武士道についての一考察―新渡戸稲造『武士道』を中心に―」、『言葉と文化』4(名古屋：名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻、2003)pp. 17-32 では、明治期の武士道を「和魂的武士道」、「皇道的武士道」、「キリスト教的武士道」の三つに分類した上で、キリスト教的世界観と武士道が如何に融和されて西欧諸国の共感を得るようになったかについて考察している。また、鈴木康史、「明治期日本における武士道の創出」、『筑波大学体育科学系紀要』24 (つくば：筑波大学体育科

を重視するため、比較文明という観点から、明治期の武士道論を国民道徳や民族精神に関する論述として把握している[3]。また、ベネット氏の研究の場合、この時期の国家主義等の背景的課題に偏って、武士道論が武士の名誉文化の再解釈だとしている[4]。そのほか、また藍氏の研究では、思想家が西洋化との向き合いに注目し、この時期の武士道論が「欧化」、「反欧化」、「欧化の超克」という課題の反映だと見做している[5]。要するに、従来の研究は、西洋化や国家主義などという背景的課題から出発したものがほとんどだと言えるであろう。

学系、2001）pp. 47-55 は、エリック・ホブズボウム Eric Hobsbawm 、テレン・スレンジャーTerence Ranger 著、前川啓治、梶原景昭訳、『創られた伝統』（東京：紀伊國屋書店、1992）P10 における「数年間急速に確立された伝統」という論説と似た観点を駆使しながら論説を展開している。鈴木氏の説によると、明治の武士道論は、武士道を国家主義と倫理主義との構成体として、過去と欧米のものを参考にした上での明治期にある産物だという。また、同氏の「明治期日本における武士道論の研究 -方法論的議論-」、『大手前大学人文科学部論集』2（兵庫県：大手前大学・大手前短期大学、2001）pp.65-76 では、前掲注 1 の BasilHall Chamberlain による武士道論の発明という枠に従って、新渡戸稲造と井上哲次郎を例として、武士道論の方法論が分析されている。以上の研究はいずれも明治における武士道論とかかわっているが、しかし、その問題意識のうえでは、本論とはかなりかけ離れている。

3 菅野覚明、『武士道の逆襲』（東京：講談社、2004）pp. 260-281 では、井上哲次郎と新渡戸稲造を例として、明治の武士道論とは、比較文明論観点によって明治の国民道徳や、民族精神を把握しようとするものだとしている。この研究は国民道徳や民族精神の構築という課題をメインとして扱っているので、武士道論自身における伝統思想への反省が見逃されている。

4 アレキサンダー・ベネット Alexander Bennett、『武士の精神とその歩み－武士道の社会思想史的考察－』（京都：思文閣出版、2009）pp.229-231 の場合、西周、井上哲次郎、新渡戸稲造を例として、武士道論とは、武士の名誉文化の再解釈として、国家主義と融合したことによる伝統の創造であるとしている。また、武士道は「軍人敕諭」と「教育敕語」を通して、軍人や臣民の道徳となったともしている。この研究は、前掲注 3 菅野氏の研究とは論述をする方法の上でやや異なっているが、しかし、いずれも国家主義等という武士道をめぐる背景的課題を重視しているもので、武士道論自身の持っている伝統への反省を無視している。

5 藍弘岳、「近現代東亞思想史與「武士道」：傳統的發明與越境」、『台灣社會研究季刊』85（台北：台灣社會研究國際中心、2010）、pp.51-88 では、山岡鉄舟、福沢諭吉、新渡戸稲造、井上哲次郎を例として、近代日本の武士道論とは、伝統への回帰と欧化が交わっている中で、「欧化」、「反欧化」、「欧化の超克」という課題を反映し、武士道がそこから創造された伝統であるとしている。しかし、後に述べられているように、数々の武士道論では、欧化や反欧化のほか、実際、伝統思想である神、儒、仏への反省が大量に見られる。藍氏の研究では、思想家においてその欧化への対応という一面が確に描かれているが、しかし、それと同時進行している在来や伝統への反省という一面が欠如している。

国際日本文化研究センター所蔵資料

ところが、周知の通り、明治 30-40 年代の国や社会というのは、西洋化や国家主義などの課題も無論のことだが、一方で、伝統思想への熾烈な改革や反省も進められていた[6]。かくした複雑な状況に続々と登場してきた武士道論を把握する際、西洋化や国家主義などという背景的課題も勿論のことだが、一方で、武士道論自身における伝統思想への反省という課題からも考察する必要があるのではないかと疑問を禁じえない[7]。

そこで、本研究は改めて武士道論における伝統思想への反省という課題を取り上げて、山岡鉄舟、新渡戸稲造、井上哲次郎の武士道論を対象に、それぞれにおける伝統思想への反省を分析してまとめることによって、明治 30-40 年代における武士道論の様相の一部を浮き彫りにする。

二、1902 年山岡鉄舟『武士道』の場合

山岡鉄舟（1836 年- 1888 年）はかつて勝海舟（1823 年- 1899 年）

---

[6] この時期では宗教改革が重要な精神課題の一つである。特に仏教へ降りかかる「廃仏毀釈」という衝撃が更に激烈である。それに関して、安丸良夫、『神々の明治維新―神仏分離と廃仏毀釈』（東京：岩波書店、1979）pp.85-118 が有益な参考になる。また、それに応じて起きた明治仏教界自身の改革も注意すべきものである。末木文美士、『明治思想家論 (近代日本の思想・再考)』（東京：トランスビュー、2004）pp.3-18 が詳しくそれに触れているので、参考とされたい。

[7] 周知の通り、武士道が主に仏教や儒教などといった伝統的要素から構成されているものである。御一新や文明開化で、廃藩置県や徴兵令や武士制度の廃止などがすすめられ、在来の制度や文化が衝撃を受けるようになった。それにともなって、武士道の精神を支えてきた伝統的な仏教関係や儒教関係の思想界も各々変化を呈していた。たとえば、仏教の場合、注 6 にあるように、「廃仏毀釈」をきっかけに、仏教思想界が個人の内面を深めるという方向へ動いていた。また渡辺和靖、『明治思想史―儒教的伝統と近代認識論 』増補版（東京：ぺりかん社、1985）、pp.349-361 に指摘されているように、儒教や漢学界の場合も、実証性を前面に押し出したり、諸学派を折衷したりするという方向に進んでいた。ともかく、維新後、新体制にある文官や武将の場合、彼らの精神はどうあるべきか、が重要な課題となっている。この問題に関して、従来の研究はすでに西洋化や**国家主義などという背景的課題から言及している。それに対して、本研究の場合、背景的課題から全く切り離して議論できるとしているわけではなく、ただ、従来の研究と違った角度から把握することを試みる。つまり、維新後**、新体制の精神のあり方に関して、従来の武士道を継続的に使うべきかどうか、**武士道や武士道に内蔵れる**伝統的要素への反省、という視点に絞って検討してみる。

臺灣大學學術期刊資料庫

とともに江戸無血開城を成し遂げた幕臣で、維新後、明治天皇に侍従として仕えていた。一方、剣術家という顔もあって、一刀正伝無刀流の開祖として仰がれ、一生修業して「禅剣一致」に到達しようとしていた。この鉄舟はかつて明治 20 年（1887）に籠手田安定から依頼を受け、四回に分けて武士道について口述していた。その内容が安部正人によって「山岡先生武士道講話記録」と記録され、明治 31 年 1898 年にさらに勝海舟の評論を経て、その評論とあわせて本としてまとめられ、やがて明治 35 年（1902）に光融館によって『故山岡鉄舟口述 故勝海舟評論 安部正人編纂 武士道』(略稱『武士道』)という書名で出版された。かかる経緯により、今日、われわれはこの本を通して、1887 から 1902 年の間の、鉄舟と海舟の武士道に対する考えがうかがえるのである[8]。

その『武士道』のはじめのところで、まず自分の武士道は仏教の教理より汲んでいると鉄舟が自ら語っている[9]。それに対して、海舟も後の評論の中で、鉄舟の武士道がまさに彼自身の言った通り、仏教や禅理から出たものだとも評価している[10] 。さて、そもそも、鉄舟が言っている武士道とは何かについて、次のような説明が見られる。

> 發達には幾多の原因がある、武士其の者の地位も一原であるが、大に之れを輔けて、忠孝、節義、勇武、廉耻を奬勵したものは、神儒佛三道一貫の大道が日本人天性の元氣に保助的感化を興へ

[8] 山岡鉄舟に関する伝記や紹介はかなり多いが、剣道理念や剣術関係のものがほとんどである。たとえば、児玉正幸・大坪壽、「山岡鉄舟の剣禅修行道の極地に至る道程 : 生死得脱の円現へ」、『学術研究紀要』25(鹿屋 : 鹿屋体育大学、2001) pp. 31-37 や、長谷川 弘一、「剣道におけるイメージ・呼吸法についての実践的試論(2)山岡鉄舟の剣と柳生新蔭流 」、『会津大学文化研究センター研究年報』13(会津若松 : 会津大学、2006) pp. 49-64 などである。また、Anshin Anatoliy、「山岡鉄舟の随筆と講話記録について」、『千葉大学日本文化論叢』7(千葉 : 千葉大学文学部日本文化学会、2006) pp. 104-92 は、山岡鉄舟の『武士道』にも言及しているが、それは安部正人による編纂事情が中心としたものである。

[9] 山岡鉄舟述・安部正人編、『武士道』P10「武士道の要素」（東京：光融館、1902)。山岡鉄舟の『武士道』、下引同略。

[10] 『武士道』pp.46-47「勝海舟翁評論」。

臺灣大學學術期刊資料庫

たものである、殊に佛教の賜恩が非常のものである[11]。

武士道には多くの発展要素がある。武士が忠孝や節義などの倫理を奨励するのは、「神儒佛三道一貫の大道」により日本人の天性が感化されたからである。とりわけ仏教はこの大道への感化が最大である。ここでの武士道とは、所謂「神儒仏一貫の大道」と関わり、つまり神儒仏が一貫した道である。特に仏が最も影響している。また、この武士道について、神仏が関係深いことについて、以下のように説明される。

世人が神と尊ひ佛と敬ふ尊稱は只だ其の形外上の稱號にして、其實體に至りては、神佛一體一貫の道である[12]。

そこによれば、神仏はただ形の上での称号の違いに過ぎず、その本体は「神仏一体一貫」 の道であるという。つまり、鉄舟にしてみれば、神仏はいわば「異名同道」であり、両者とも一貫した道である。ともかく、武士道を発展させた要素は、神仏一体のみならず、神、仏、儒三つが一貫した道なのである。

以上から、仏教の影響にしろ、神儒仏一貫としたものにしろ、また神仏一体にしろ、ともかく、鉄舟の武士道には伝統思想が満ちていることがうかがえる。ただ、注意してもらいたいのは、維新後、西洋化が進んでいる一方で、この時期には、神仏分離の実行と共に、日本中、次々と廃仏毀釈運動も進行していたことである[13]。その最中で、鉄舟が敢えて「神仏一体」という武士道を唱えていたということから、彼が当時の社会の動きに対して批判的な立場を示していたといえるであろう。ちなみに、彼の批判について、また以下のような二点を指摘しておきたい。まず、彼はこのように言う。

我が歴代の　至尊を初め奉り、百官臣僚も神佛同體として尊信し給ひしは誠に至當の道理である、…（中略）…、我國は神佛一體、靈驗妙應、寔に在すが如き國であると云へば、今日の科

[11] 『武士道』P58「武士道發達の要素　神、儒、佛」。
[12] 『武士道』P26「武士道の要素」。
[13] 「廃仏毀釈」に関しては、前掲注 6 を参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

> 學、學問に偏信した生意氣連中が、科學的證明に示めさるるものでなければ、總て信ずるに足らんと云ふかも知れむ[14]。

鉄舟にしてみると、神仏同体は古きより百官臣僚に仰がれて信じられてきた道理である。日本という国は「神仏一体、霊験妙応」の中で存在してきた国である。しかし、現在、科学を妄信している連中が科学証明できないと言って、それらを否定している。要するに、鉄舟は当時科学至上の考えで「神仏一体、宗教霊妙」を否定した人々を痛烈に批判しているのである。ともかく、鉄舟の場合、前に述べていた神仏分離の論も、ここでの「神仏宗教非科学」も、一切批判しているのである。さらに、彼はこのようにも言う。

> 近頃拙者の許に内外幾多の人が遣つて來る、夫れ等諸人の言葉の中に、或は基督主義とか、儒教主義とか、一々擧げ兼ねる程多いが、要する處皆な迷い話で枝葉を持ち扱ふて居る工合である、例令ば、佛と神とは更に其實を異にするとか、國家主義と個人主義とは相反目して、全く容れられぬものだとか、彼れ是れ迷說限りがない[15]。

最近、基督主義や儒教主義が言い出されているが、いずれも迷いの説である。それは真理の枝や葉、つまり真理の僅かな一端のみを摘んでいるに過ぎない。彼らの場合、神と仏は異なるといい、国家主義は個人主義と対立するといい、いずれも迷いの極まりだという。それに止まらず、仏教が国体に合わないとか、神、儒、仏の宗教は要らないなどと宣言した人に対して、鉄舟は容赦なく罵倒している。[16]

ともかく、当時、神道や儒教を中心とした国家主義論や、キリスト教や仏教を中心とした個人主義論は、いずれも真理の枝や葉のように、いわば真理の部分的なもので、幹や全体像というものではない。なぜなら、鉄舟からみれば、そもそも、道は神儒仏一体として

[14] 『武士道』P169「武士道の精華」。
[15] 『武士道』pp.228-229「武士道の諸義」。
[16] その原文は『武士道』pp.230-233「武士道の諸義」をご参照。

臺灣大學學術期刊資料庫

一つしかなく、つまり、それは「神儒仏三道一貫の大道」だからである。

要するに、武士の伝統をそのまま受け継いだ山岡鉄舟の場合、彼による『武士道』から見ると、仏や禅の立場を源としながら、科学至上や神仏分離、仏教排斥等を批判した上で、所謂「神儒仏三道一貫の大道」という武士道が打ち出されているとまとめられるであろう。

三、1899 年新渡戸稲造『武士道』の場合

言うまでもなく、今日世界中が武士道を認識し始めたのは、ほとんどは新渡戸稲造（1862 年- 1933 年）の『武士道』が世に問われてからのことだろう。新渡戸は藩士の家出身で、長じて洗礼を受けて入信し、後にアメリカやヨーロッパを留学して、帰国後、京都帝国大学教授や台湾総督府糖務局長、東京帝国大学教授、第一高等学校校長、国際連盟事務次長等を歴任した。彼による『武士道』は、最初は、明治 32 年（1899）に英語で書かれて出されていた。後に、桜井鴎村によって日本語に翻訳され、明治 41 年（1908）に丁未出版社によって日本で出版されたのである[17]。

臺灣大學學術期刊資料庫

[17] 新渡戸稲造に関する研究は少なくない。詳しくは松下菊人、『国際人・新渡戸稲造』（東京：ニューカレント インターナショナル、1987）pp.231-246、または、拙著『新渡戸稲造研究—『武士道』とその後』（台北：南天書局、2006）pp.5-15 を参照されたい。これまでの新渡戸稲造研究をまとめて言うと、大体、新渡戸の生涯研究と新渡戸思想研究の二種類に分けられる。特に思想的研究の場合、武田清子と佐藤全弘が最も群を抜いている。が、両氏の論述の中心は、新渡戸が如何にキリスト教を受け入れたか、またそのような思想は如何なるものかという点にある。そのほか、新渡戸における武士道を取り上げて論じているものとしては、谷口真紀、「渡戸稲造の『武士道』--東西文化の架け橋」、『比較文化研究』97（弘前：日本比較文化学会、2011）、pp.77-87 もあるが、武士道とキリスト教との「接木型」思考を中心に論じているものである。また、M. La Fay、「新渡戸稲造と内村鑑三の武士道」、『基督教學』45（札幌：北海道基督教学会、2010）、pp.30-39 という研究も、日本の道徳に触れているが、キリスト教関係のものがメインである。要するに、従来の新渡戸稲造研究は、新渡戸と明治武士道の形成との関係について論じているものは、意外に少ない。しいて言えば、舩場大資、「「明治武士道」にみる「文明の精神」の普及：新渡戸稲造と実業之日本社を中心に」、『東アジア研究』13（山口市：山口大学大学院東アジア研究科、2015）、pp.223-245 が取り上げられる。が、舩場の論は、『武士道』で西欧の道徳を日本的な言葉で翻訳したこと及び、雑誌『実業之日本』に見られる武士道という両視点

その『武士道』によると、武士道の要素は仏教、神道、儒教だとはっきり主張されている。まず、このように言う。

> 運命に任すといふ平静なる感覚､不可避に対する静かなる服従、危険災禍に直面してのストイック的なる沈着、生を賤しみ死を親しむ心、仏教は武士道に対して之等を寄与した[18]。

仏教が武士道に与えたことは、生死への執着を軽視し、人々に冷静に災難と向き合って落ち着かせ、平然と自身の運命に従わせたということである。このほか、このようにも主張する。

> 仏教の与へ得ざりしものを神道が豊かに供給した。神道の教義によりて刻み込まれたる主君に対する忠誠､祖先に対する尊敬、並に親に対する孝行は、他の如何なる宗教によっても教へられなかった程のものであって、之によつて武士の傲慢なる性格に服従性が賦与せられた[19]。

神道の教義から学んだことは、忠誠や祖先を尊敬することや、親孝行を人の心に刻み込むということである。それにより、傲慢な性格の武士が服従性を持つようになったという[20]。また、このようにも言う。

> 厳密なる意味に於ての道徳的教義に関しては、孔子の教訓は武士道の最も豊富なる淵源であった[21]。

臺灣大學學術期刊資料庫

から、明治武士道の普及を考察しようとしているものだが、明治の武士道論説に見られる武士道の形成は不明のままである。

18 『武士道』の和訳は確か桜井鴎村の訳本が最初であるが、しかし、1938 年に出版されている矢内原忠雄の訳本が決定版であることが学界の定評である。本研究の場合、矢内原忠雄の訳本の誤植を修正するなどした新渡戸稲造全集編集委員會所編、『新渡戸稲造全集』v.1『武士道』（東京：教文館、2001）を底本とするのである。また、この段落の出典は『武士道』P.35「第二章 武士道の淵源」である。新渡戸稲造の『武士道』、下引同略。

19 『武士道』P36「第二章 武士道の淵源」。

20 「忠孝」や服従というと、神道のものだというより、儒教のものだというのが一般的であろう。しかし、新渡戸によるこの段落の書き方や前後の文脈からだと、「忠孝」や服従が神道のものであると思わせてしまう。では、漢籍にも触れている新渡戸は、なぜそのような書き方をしているか、が一つの問題である。案ずるに、新渡戸は天皇制国家の成立と深く関わっている教育勅語が強く意識されている時代を生きている人物である。また、教育勅語の中身自体は儒教が基礎である。そこで勅語に影響されていながら、神道の段落に「忠孝」や服従が混ぜているという表現が現れているのであろう。

21 『武士道』P38「第二章 武士道の淵源」。

儒教の場合、それが武士道の道徳教義を豊かにさせたという。

以上をまとめると、仏、神、儒三者はともに武士道を構成しており、まず、武士道の死生観は仏教の死生への諦観によるものであり、さらに、神道は武士の忠孝とその服従性を規定し、また、その具体的な道徳綱目は儒教から来たのである。ともかく、ここでは、仏、神、儒三者が武士道の基本要素であることが明らかに見られるであろう。

ところで、武士道の具体的な内容とは何だろう。それについて、新渡戸はこのように言う。

> 私が大ざつぱにシヴァリーChivalry と訳した日本語は、その原語に於ては騎士道といふよりも多くの含蓄がある。ブシドウは字義的には武士道、即ち武士がその職業に於て守るべき道を意味す。一言にすれば、『武士の掟』も即ち武士階級の身分に伴う義務である[22]。

この文章によれば、武士道は騎士道に相当し、武士という職業の道徳として、武士という階級が尽くすべきことでもある。そして、また、このようにも言う。

> 私は武士道に対内的及び対外的教訓のありしことを認める。後者は社会の安寧幸福を求むる福利的主義であり、前者は徳の為めに徳を行ふことを強調する純粋道徳であつた[23]。

武士道の道徳作用は対内的と対外的といった二つの面を兼ねている。対内的とは個人の道徳実践であり、対外的とは社会の安定的な幸福の追求である。ともあれ、武士道とは武士という職業が守るべき道徳規範であり、英国の騎士道に相当し、武士における武士道の実践が内向きと外向きの働きを持っているのである。

一方、武士という職業が消えてから、武士道の行方はどうなったのだろう。これに関して、武士道は封建制度による産物であり、封

22 『武士道』P30「第一章 道徳体系としての武士道」。
23 『武士道』P120「第十五章 武士道の感化」。

臺灣大學學術期刊資料庫

建制度は滅んだが、武士道はまだ残存しており[24]、しかも、武士道による感化が今でも人の心に植え付けられていて、無意識的に人々を教化している[25]と新渡戸は言う。また、このようにも言う。

> ヨーロッパの経験と日本の経験との間に於ける一の顕著なる差異は、ヨーロッパにありては騎士道は封建制度から乳離れしたる時、基督教会の養ふところとなりて新に寿命を延ばしたるに反し、日本に於ては之を養育するに足る程の大宗教がなかった事である。従つて母制度たる封建制の去りたる時、武士道は孤児として遺され、自ら赴く処に委せられた。現在の整備せる軍隊組織は之をその保護の下に置き得るであらう[26]。

ヨーロッパは封建制度が崩壊した後、騎士道がキリスト教会という体制の下に移って依存し、そこで影響力を発揮し続けている。日本でも封建体制が崩壊したが、しかし、武士道が頼って依存できるような宗教組織はまだない。そこで、現在はとりあえず、軍隊の組織制度が武士道を落ち着かせてかろうじて維持させているというのである。

ここでは、武士道が騎士道に擬えられて対比されている。しかも封建制度崩壊後、現在、武士道はしばらく軍隊組織の下に置かれているしかないという。裏を返せば、騎士道が教会に依存している関係のように、武士道もやはり教会のような組織に頼ってこそ存続させられると新渡戸は考えるのである。このキリスト教と武士道の結びつきに関して、新渡戸はさらにこのように説明する。

> 功利主義及び唯物主義に拮抗するに足る強力なる倫理体系は基督教あるのみであり、之に比すれば、武士道は『煙れる亜麻』の如くであることを告白せざるを得ない。併し救主は之を消すことなく、之を煽いで焔となすと宣言した。救主の先駆者たるヘブルの預言者達、就中イザヤ、エレミヤ、アモス、及びハバ

[24] 『武士道』P29「第一章 道徳体系としての武士道」。
[25] 『武士道』P130「第十六章 武士道は尚生くる乎」。
[26] 『武士道』P133「第十七章 武士道の将来」。

臺灣大學學術期刊資料庫

> ククら等と同じく、武士道は特に治者、公人及び国民の道徳的行為に重きを置いた。之に反してキリストの道徳は殆んどら個人、並に個人的にキリストを信ずる者に関するものであるから、個人主義が道徳的要素たる資格に於て勢力を増すに従ひ、実際的適用の範囲を拡大するであらう[27]。

現在、功利主義と唯物主義に対抗しうるのは、キリスト教のみだろう。武士道の現状は完全燃焼しておらず、徹底的に発揮できない。だが新渡戸は、神は武士道を消失させず、復活させると信じている。そもそも、武士道は特に統治者から国民へといった個人道徳も含めた団体秩序のある道徳を重んじている。それに対して、キリスト教の道徳はもっぱら個人の信仰が中心である。その両者が融和すれば、個人主義はその道徳的要素がさらに強化されて、その応用範囲も団体秩序維持へと拡張されるようにもなるのである。ともかくここでは、キリスト教と武士道の結びつきには相乗効果があると主張されているのである。

以上をまとめると、武士家庭出身だが、キリスト教の洗礼を受けた新渡戸の場合、彼による『武士道』では、神や儒、仏、キリストとの疎通を図り[28]、武士道をキリスト教に相当する宗教道徳として位置づけ、また武士道における神や儒や仏の役割が、それぞれ忠孝服従の精神、道徳綱目や死生観だと明らかに定義している。また、武士道と騎士道を対比させることによって、武士道がキリスト教や教会のような組織に頼って存続していけるとも示唆している[29]。そ

臺灣大學學術期刊資料庫

---

27 『武士道』pp.137-138「第十七章 武士道の将来」。

28 新渡戸の武士道論は、神、儒、仏、キリスト教を疎通させ、武士道をキリスト教と対比するように位置づけることで、武士道がキリスト教と相当するような道徳体系だとしている。ある意味では、その論は当時、キリスト教の国家主義への折衷妥協だということも意味している。その詳細は拙著『新渡戸稲造研究—『武士道』とその後』(台北：南天書局、2006) pp.208-209 を参考とされたい。

29 新渡戸と植村は、同じく国家主義へ妥協したキリスト教者として、同じくキリスト教と結びつくことによって武士道を復興させるという論を出しているが、武士道における伝統的要素への取捨においては、両者はやや異なっている。植村の場合、選別を加えた上で、儒と仏を否定している。それに対して、新渡戸の場合、三教を包摂する形で、伝統的な仏、神、儒の三教一体を肯定している。また、新渡戸と植村の武士道論や、武士道とキリスト教が融

のほか、武士道が個人的道徳と団体的道徳を持ち合わせているので、キリスト教における個人主義の氾濫を緩和することができるとしているのである。

詰めて言うと、新渡戸は、直接仏、神、儒三要素の働きを規定した上で、武士道と騎士道との対比によって、キリスト教と伝統的な考えを調和させ、武士道の将来をキリスト教との結びつきに託しているのである。彼はなぜこの伝統的三要素を持つ武士道がキリスト教と調和できると考えているのか。それは、恐らく発想の根っこのところで、伝統的思想における「天」とキリスト教における「神」、その両者を一致させているからであろう[30]。

臺灣大學學術期刊資料庫

四、1902 年井上哲次郎『巽軒講話集(初編)』の場合

井上哲次郎（1855 年- 1944 年）は明治の哲学者であり、東京帝大文科大学の学長も務めていた。彼は東西の哲学の融和に取り組み、国家主義の立場から宗教を批判し、キリスト信者と論戦を繰り広げ、道徳教育を推し進めていた。井上はかつて陸軍学校で武士道について講演をしていた。その内容が最初、兵事雑誌社によって『武士道』に収められて 1901 年に出版された。やがて、彼の武士道についてのほかの談話と共に『巽軒講話集(初編)』がまとめられて出版された。本研究はそれを対象に、考察を進めてまいりたい[31]。

和した具体的な修養論に関しては、拙稿「析論植村正久之基督教與武士道關係」、『東華人文學報』第八期（花蓮：國立東華大學人文社會科學學院、2006）pp.149-172、張崑將、「明治時期基督徒的武士道論之類型與內涵」、『台大文史哲學報』第七十五期（臺北：台灣大學文學院、2011）pp.181-215 や、拙著『新渡戸稲造『修養』の思想的研究』（台北：南天書局、2014）pp. 71-73 が大いに参考になるであろう。

[30] 新渡戸稲造による『修養』では、「天」が「神」と一致しているという考えがはっきりと見られる。その詳細は拙著『新渡戸稲造『修養』の思想的研究』（台北：南天書局、2014）pp. 40-45 の考証を参考とされたい。

[31] 井上哲次郎に関する研究は大体、井上における儒学や、宗教と教育の論争や、国民道徳や、『巽軒日記』などの研究が中心である。たとえば、儒学関係のものとしては、瓜谷直樹、「井上哲次郎の儒学研究の再検討 : 陽明学を中心に」、『教育文化』20（京都 : 同志社大学社会学部教育文化学研究室、2011）、pp.107-81 があり、宗教と教育の論争のものとしては、繁田真爾、「一九〇〇年前後日本における国民道徳論のイデオロギー構造(下)井上哲次郎と二つの「教育と宗教」論争にみる 」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第 3 分冊』

まず、井上にしてみれば、仏教もキリスト教も、いずれも妄誕無稽で、必要のないものである[32]。仏教は過去の日本では必要とされていたかもしれないが、その役命はもはや終了している。その代わりに、現在、国で必要とされているのは徳教である[33]。今日、国の教育方針には何の宗教も要らず、道徳教育さえ実行すれば十分である。道徳が宗教に取り替わっていたことが、すでに、徳川時代では証明されていた。徳川時代までは、仏教は勢力がとても大きかったが、徳川時代になってから、僧侶だった藤原惺窩や谷時中や山崎闇齋などが続々と仏教を捨てて儒教を提唱するようになり、そこで徳川三百年の教育主義が成立したと井上は指摘している[34]。ここでは、井上が仏教を否定して儒教の働きを肯定していることが見られる。

井上はさらに仏教をこのように批判する。

> 以前の如き荒誕無稽の佛教に依らずして着實なる世間主義に依ること[35]になりました、徳川三百年の教育主義と云ふものは世間的道徳主義が出世間的道徳主義に打勝つて優勢を占めて來たる事實を現はして居ります、今後と雖も同様である教育社會の執るべき道徳主義は宗教以外のものであつて世間的の性質を有して居るものでなければならぬ、無數の迷信の附隨して居る所の宗教に依るべきでない、…（中略）…、今後の道徳は先刻から言ひました様に東西洋の智的情的の道徳を打つて一丸と為して武士

臺灣大學學術期刊資料庫

54（東京：早稲田大学大学院文学研究科、2008）、pp.173-184 がある。また、国民道徳のものとしては、江島顕一、「明治期における井上哲次郎の「国民道徳論」の形成過程に関する一考察--『勅語衍義』を中心として」、『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』67（東京：慶應義塾大学大学院社会学研究科、2009）、pp.15-29 があり、『巽軒日記』関係のものとしては、村上 こずえ、「井上哲次郎『巽軒日記：明治四三年』」、『東京大学史紀要』33（東京：東京大学文書館、2015）、pp.61-114 などがある。しかし、井上の武士道論説と明治武士道との関係に関するものは、あまり見られない。

[32] 井上哲次郎、『巽軒講話集(初編)』P 370「教育雑感」（東京：博文館、1902）。『巽軒講話集(初編)』、下引同略。

[33] 『巽軒講話集(初編)』P371「教育雑感」。

[34] その原文は『巽軒講話集(初編)』P34「教育の方針に就いて」をご参照。

[35] 合略仮名の画像で、「こと」と読む。下略同。

道に依つて之を實行するものでなければならぬと思ふ[36]。

徳川の教育主義は荒誕無稽の仏教に取り付かず、世間を生きるためにある道徳主義とするがその内容である。今後の道徳主義も宗教迷信から解放され、東西洋の「智的・情的」な道徳を取り入れた上で、武士道によって実行すればいいと井上は示している。前述したように、徳川教育が成功したのは仏を儒に取り替えたからだという考えが一層ここではっきりと見られる。井上はここで直接仏教を荒誕無稽だと批判した上で、宗教と関わりのないような道徳主義を提唱している。しかも、武士道がその道徳主義の実行力となっていると言っている。さて、そもそも、武士道とは如何なるものか。

井上によると、武士道は日本人の本来の精神であり、鎌倉時代で儒教や禅に影響されながら発展し、徳川時代となって、その内容が道徳主義へと変わった。この優美な精神を捨てる必要はない[37]。言い換えれば、武士道と禅との深い関係は認められているが、しかし、徳川の武士道は仏教の影響からぬけて儒教が中心であることへ変わったと井上は考えているのである。武士道の性質について、井上はさらにこのように説明する。

> 武士道といふものは別に哲學などヽ[38]いふやうな仰々しく議論する方で無くして全く實行の主義であります、…（中略）…、理論は西洋の倫理學の如きものを採つて其不足を補はぬければならぬけれ共、總て學び得た所の道徳を實行しやうといふ其實行の精神は武士道の精神といふやふなものに依らぬければ到底其功を奏することが難いのであります、夫で如何程深遠なる道徳上の理論を學んでも詰り運用は我に在るです、其運用の精神は此武士道の精神に優つて居るものは無いです[39]。

---

[36] 『巽軒講話集(初編)』pp.34-35「教育の方針に就いて」。
[37] 『巽軒講話集(初編)』P76「我邦德育前途」。
[38] 「ヽ」は踊り字である。一般の場合、平仮名を 2 文字重ねるときは「ゝ・ゞ」を、片仮名を 2 文字重ねるときは「ヽ・ヾ」を使用するのが原則である。だが、この著作の場合、平仮名を 2 文字重ねるときは「ヽ・ヾ」を、片仮名を 2 文字重ねるときはより小さめの「ヽ・ヾ」を使用するのである。
[39] 『巽軒講話集(初編)』pp.328-329「教育雑感」。

臺灣大學學術期刊資料庫

武士道とは実行主義であって哲学ではないという。西洋の倫理学によってその不足な点を補うことができるが、しかし、道徳実践の上では、やはり本来の武士道の長所である実行精神に頼るべきだとしている。ここでは、武士道は哲学から切り離され、一種の実行精神と見做されていると見られる。この武士道精神について、またこのように説明する。

> 武士道の精神を能く考へて見ると云ふと決して利己主義では無い、決して功利主義では無い、是には丁度先刻申したカントヘーゲル諸氏の哲學より講じ來つた倫理學を接續することが出來る、…（中略）…、其實行の精神、其決心を促すの力、夫は又ナカ／＼單に理論的研究に依つて得らるべきやうなものでは無いだから之に接續するに西洋の哲學に基いたる道德主義を以てしましたならば哲學と武士道といふ者が茲に合一して日本の德育の中心となるものが出來るに相違ないと私は信じて居ります、勿論武士道といふものを昔の通りに今後やらぬければならぬ抔といふことは決して無い、昔の武士道の弊もナカ／＼ある、夫れは勿論大に變へぬければならぬ[40]。

武士道は利己主義でも功利主義でもなく、カントやヘーゲルの観念論の哲学や倫理学に繋ぐことができる。もし、武士道の実行精神の決心や行動力をさらに西洋哲学の道徳主義に繋ぎ、つまり哲学と武士道を一体にすれば、それが日本の道徳教育の中心となるだろうとしている。また、武士道はこれまでのやり方のままにする必要はなく、その弊害を取り除く必要があるという。要するに、武士道は、その実行精神を観念論の道徳主義に繋ぐことで、日本の道徳教育の中心となり、また武士道自体が変わらなければならないというのである。

さて、伝統としている武士道を変える必要があるとはどういうことだろう。それについて、井上はこのように主張する。

> 固より昔の武士道を其儘今日に回復する抔といふことは得策で

[40] 『巽軒講話集(初編)』pp.76-77「我邦德育前途」。

臺灣大學學術期刊資料庫

> 無いことは分つたことである、昔の武士道は或點から云へば隨分野蠻とも云はぬければならない點があるです、即ち復讐であるとか切腹であるとか、アヽ[41]云ふやうなことはもう今日では誰も奬勵するやうなことで無い、併ながらさう云ふ形を退けて其精神といふものは採つて來られないことは無い、我邦の兵士が日清戰爭に又聯合軍に於て大に武功を顯したといふことも決して偶然では無い、武士道の精神が今に至つて彼等の頭腦中に存續しているに相違ない、武士道の形骸は封建制度の廢せらるヽ[42]と共に無くなつたものでありますけれ共、武士道の精神は其時に忽ち消え失せたといふ譯は無くして矢張り日本國民の精神として存續して居るに相違ない[43]。

昔の武士道の野蛮的な部分、例えば、敵討ちや切腹などは、今日では、もはやそれをすすめる必要はない。それらを取り除き、その精神だけを取り残すべきである。日本兵が日清戦争で手柄を立てたのは武士道の精神がまだ彼らの脳裏に働いているからである。武士道の形骸である封建制度は廃止されたが、その精神としているものが突如消えることはなく、日本の国民精神としてなお存在し続けているはずだと言う。ここでの武士道の変えるべき部分とは、その制度のことだが、その制度を実行する精神自体は国民精神として保留すべきだとしている。なぜなら、それが日本兵が大国に戦勝した原因だとしているからである。

以上の通り、まず、武士道は儒、仏に深く影響されているが、宗教からの教育への介入は認められず、キリスト教や仏教は完全に排除すべき対象だとしている。それに対して、儒教は肯定されている。なぜなら、井上にしてみれば、儒教は宗教ではなく、一種の道徳主義だからである。また、仏教を捨てて儒教を提唱することによって徳川三百年の教育主義が成立したという井上の論調からすると、江

41 「ヽ」は踊り字である。前注参照。
42 「ヽ」は踊り字である。前注参照。
43 『巽軒講話集(初編)』P329「教育雑感」。

臺灣大學學術期刊資料庫

戸時代の武士の思想において、儒教と仏教が両者補完するという関係は井上に全く無視されていると推知される。次に、井上が考えている武士道の精神はただ一種の純粋な行動精神のようなもので、道徳主義の実践行動力である。その実行精神は、かつて江戸時代に儒教の道徳主義と結びついて封建制度を支えてきたが、将来的にはまたドイツの道徳主義と結びついてその働きを発揮していけるとしているのである。

この章節をまとめてみると、井上による『巽軒講話集(初編)』の場合、武士道は宗教と関係がなく、一種の実行精神だとしている。彼の場合、仏教やキリスト教、あらゆる宗教を迷信として否定している。また、儒教は宗教と関係がなく、それがドイツ観念論と結びついた上で、道徳主義として武士道の実行精神によって実践されるべきだとしている。これにより、井上による武士道論とは、儒教やドイツ観念論が雑揉している道徳主義論だと見受けられるであろう。ちなみに、仏教やキリスト教への痛烈な批判に対して、神道への批判が特に見られないのは、恐らく国家主義や勅語の擁護者である井上自身がそのイデオロギーに制約されているからだろうと考えられる。

臺灣大學學術期刊資料庫

五、結び

明治 30-40 年代(1897-1912)には、西洋化が進められ、国家主義も徐々に台頭してきたが、その一方で、社会や思想界では、修養書ブームや伝統への回帰という動向も現れていた。同時に、日清、日露の戦勝の後で、国民の自信が高まり、人々が伝統へ自己形成のよりどころを求めるようになってきた。その中で、武士道論が次々と再現されていた。本研究はこの時期における武士道論に対して、これまでの研究と異なった角度から、伝統への反省に焦点を当て、山岡鉄舟、新渡戸稲造、井上哲次郎の武士道論を中心に、新たに考察してきた。

まず、鉄舟の武士道論では武士道の要素を神儒仏とし、それを提

唱することによって、西洋化や科学至上論、宗教否定などに歯止めをかけるべきだとしている。次に、新渡戸は、具体的に神儒仏三者の働きを定義して、キリスト教によって武士道が存続させられると期待を寄せている。また、井上の場合、武士道から仏教という要素を指摘・否定していながら、一方、儒教の道徳主義を肯定し、武士道を実行精神として看取している。そして、仏教やキリスト教の混入を極力除いて、武士道の実行精神によって儒教や観念論が調和された道徳主義を実践すべきだとしているのである。

要するに、西洋化や科学、国家主義などの渦に巻き込まれ、しかも国家主義や勅語というイデオロギーに制約されながら、同じく伝統思想が看取された上で再現されている武士道の論説だとは言え、その思想の営みは実にさまざまである。鉄舟の武士道論の場合は、伝統思想が満ちて、神儒仏をそのまま継続させるべきであり、それで科学至上論などと対抗すべきだとしている。それに対して、新渡戸は、西洋思想における宗教という枠から出発しながら、仏、神、儒の道徳的働きを取り入れた上で、キリスト教と調和すべきだとしている。一方、井上は、西洋哲学の枠に基づいて、伝統思想の一つである儒教の道徳教育の働きを取り残した上で、ドイツ観念論と融和すべきだとしている。かくして、目的の違いにより、それぞれ武士道論の中で、神儒仏という伝統思想は、時には西洋化や科学と対抗するための武器であったり、或いはキリスト教と調和するための材料であったり、またはドイツ観念論と融和するための部品であったり様々に取り扱われている。武士道論はかくして、さまざまな精神的課題や思潮に取り囲まれながら、思想家たちにおいて、それぞれの時、処、位により、伝統思想の仏、神、儒が取捨されて生かされた上、繰り広げられているものだと見られるであろう。

とにかく、武士道論が多彩に形成されている中、西洋化や国家主義という背景的な課題との関わりも無論だが、一方で、武士道の伝統思想である神や儒、仏への深い反省も見逃せないほど随所に散りばめられている。そこで、本研究の対象に限ってみれば、一連の武

臺灣大學學術期刊資料庫

士道論の伝統への取り組みにおいて、その最大の共通点は過去の「道」の一つ、つまり儒教であることが想起されるであろう。思えば、明治という新しい時代の道徳のありかたについて、国では勅語にあるように古めかしい「忠孝」を頂点とした公式な内容が示されている。以降、その方針に応じて、伝統思想にある神や仏や儒を肯定したり否定したり、その組み換えをめぐってさまざまな模索が展開された上で、やがて、古き「武士道」が担ぎ出されることに至ったのだろうと推知される。そこで、それぞれ辿り着いたところの共通点としては、儒教を中心とした道徳が取り上げられ、また漠然とした神道が残されてていることが見受けられる。本研究で取り扱っている三つの武士道論はまさにそのような過程を経た上で、伝統から生まれ変わったものだと言えるであろう。また、同時期のほかの諸々な武士道論や、かかる儒教を中心とした思想体系にある「道」のあり方などについても、興味深い課題に違いないが、幅の制限もあり、いずれも後日の原稿に譲らせていただきたい。

【付記】本稿は「2015 年台湾大学日本語文創新国際学術研討会」（台湾大学日本語文学系、2015 年 10 月 25 日）における発表原稿を書き直したものである。なお、掲載にあたり、本誌審査委員より貴重なご意見を賜ったことにお礼を申し上げます。

臺灣大學學術期刊資料庫

参考文献

村上 こずえ（2015）「井上哲次郎『巽軒日記 : 明治四三年』」『東京大学史紀要』33 東京 東京大学文書館 pp.61-114

舩場大資（2015）「「明治武士道」にみる「文明の精神」の普及 : 新渡戸稲造と実業之日本社を中心に」『東アジア研究』13 山口市 山口大学大学院東アジア研究科 pp.223-245

笠谷和比古（2014）『武士道一侍社会の文化と倫理』東京 エヌティティ出版 pp. 3-94

簡曉花（2014）『新渡戸稲造『修養』の思想的研究』 台北 南天書局 pp.40-45、71-73

瓜谷直樹（2011）「井上哲次郎の儒学研究の再検討：陽明学を中心に」 『教育文化』20 京都 同志社大学社会学部教育文化学研究室 pp.107-81

谷口真紀（2011）「渡戸稲造の『武士道』--東西文化の架け橋」『比較文化研究』97 弘前 日本比較文化学会 pp.77-87

張崑將（2011）「明治時期基督徒的武士道論之類型與內涵」『台大文史哲學報』第七十五期 臺北 台灣大學文學院 pp.181-215

藍弘岳（2010）「近現代東亞思想史與「武士道」：傳統的發明與越境」 『台灣社會研究季刊』85 台北 台灣社會研究國際中心 pp.51-88

M. La Fay（2010）「新渡戸稲造と内村鑑三の武士道」『基督教學』45 札幌 北海道基督教学会 pp.30-39

江島顕一（2009）「明治期における井上哲次郎の「国民道徳論」の形成過程に関する一考察--『勅語衍義』を中心として」 『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』67 東京 慶應義塾大学大学院社会学研究科 pp.15-29

Alexander Bennett・アレキサンダー・ベネット（2009） 『武士の精神とその歩みー武士道の社会思想史的考察ー』 京都 思文閣出版 pp.229-231

繁田真爾（2008）「一九〇〇年前後日本における国民道徳論のイデオロギー構造(下)井上哲次郎と二つの「教育と宗教」論争にみる」 『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第 3 分冊』54 東京 早稲田大学大学院文学研究科 pp.173-184

笠谷和比古（2007）「武士道概念の史的展開」『日本研究』35 京都 国際日本文化研究センター pp. 231-274

長谷川 弘一（2006）「剣道におけるイメージ・呼吸法についての実践的試論(2)山岡鉄舟の剣と柳生新蔭流」 『会津大学文化研究センター研究年報』13 会津若松 会津大学 pp. 49-64

臺灣大學學術期刊資料庫

簡曉花（2006）『新渡戸稲造研究–『武士道』とその後』 台北 南天書局 pp.5-15、 pp.208-209

簡曉花（2006）「論植村正久之基督教與武士道關係」 『東華人文學報』第八期 花蓮 國立東華大學人文社會科學學院 pp.149-172

Anshin Anatoliy（2006）「山岡鉄舟の随筆と講話記録について」『千葉大学日本文化論叢』7 千葉 千葉大学文学部日本文化学会 pp. 104-92

末木文美士（2004） 『明治思想家論 (近代日本の思想・再考)』 東京 トランスビュー pp.3-18

菅野覚明（2004） 『武士道の逆襲』 東京 講談社 pp.260-281

船津明生(2003)「明治期の武士道についての一考察―新渡戸稲造『武士道』を中心に―」『言葉と文化』4 名古屋 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻 pp. 17-32

児玉正幸・大坪壽（2001）「山岡鉄舟の剣禅修行道の極地に至る道程 : 生死得脱の円現へ」『学術研究紀要』25 鹿屋 鹿屋体育大学 pp. 31-37

鈴木康史（2001）「明治期日本における武士道の創出」『筑波大学体育科学系紀要』24 つくば 筑波大学体育科学系 pp. 47-55

鈴木康史（2001）「明治期日本における武士道論の研究 -方法論的議論-」『大手前大学人文科学部論集』2 兵庫県 大手前大学・大手前短期大学 pp.65-76

新渡戸稲造著・新渡戸稲造全集編集委員會所編（2001） 『新渡戸稲造全集』v.1『武士道』 東京 教文館

エリック・ホブズボウム Eric Hobsbawm 、テレン・スレンジャー Terence Ranger 著、前川啓治、梶原景昭訳、『創られた伝統』（東京： 紀伊國屋書店、1992）P10

松下菊人（1987）『国際人・新渡戸稲造』 東京 ニューカレント インターナショナル pp.231-246

渡辺和靖（1985）『明治思想史―儒教的伝統と近代認識論 』増補版 東京 ぺりかん社 pp.349-361

臺灣大學學術期刊資料庫

安丸良夫(1979)『神々の明治維新―神仏分離と廃仏毀釈』東京 岩波書店 pp.85-118

バジル・ホール・チェンバレン B. H. Chamberlain 著・高梨健吉訳(1969)『日本事物誌 1』 東京 平凡社 pp. 86-102

佐藤堅司 (1939) 「「武士道」といふ語の起原と發達 「武士道思想の發達」を傍系として」 『駒澤地歴學會誌』2 東京 駒澤大学 pp. 7-27

橋本実 (1934)『日本武士道史研究』 東京 雄山閣

バジル・ホール・チェンバレン B. H. Chamberlain (1912) 『The Invention of a New Religion』 LONDON WATTS &CO.,

山岡鉄舟述・安部正人編 (1902) 『武士道』 東京 光融館

井上哲次郎 (1902)『巽軒講話集(初編)』 東京 博文館

臺灣大學學術期刊資料庫